

見えないもの

松本西夏

見えないものを見る
空の上
大気の渦
海の底
細胞の深奥

見えないものを感じる
蒼空に零れ落ちる涙の一滴
指先に絡みつく微粒子の揺らぎ
大脳辺縁系の震え
檻の内に閉ざされた時の嵩かさ

見えないものと思う
織りなす情動の寄せ引き
嫉み、悲しみ、怒り、
荒び、諦め

見えますか

なにを見ているのですか
見えていますか
終わった線香花火の飛沫の艶
しなびた夕顔の含羞がんしゆう
葛の叢に紛れ落ちた一葉の
家族係累などと呼ばれていたのだった
写真のころ

もしかして
違う領分までもが見える目だつて
あるのかもかもしれません
それはそれ
まるで知らない流れの縁に
ゆらりと立っているのかもしれない
ニンゲンと立っているのかもしれない
誰彼かまわず抱きつきたくなる性分の
そんな素のニンゲンの恰好で

飛びたつ

決まって考え込んでいた
それはひとつのなにかを
どこかへ運びあぐねている
かのようにであつた

そこにはときに
がんにがらめの
縄がかけられていたり
またときには
舶来ものの化粧が
施されたりしていた

彼女は
いつも心臓をやられていた
彼女の眠りは
彼女の眠りではなかつた
それが問題であつた

飛び立たねばならない
飛び出さねばならない

彼女の焦りは
屋上から
隣の屋上に
容易くジャンプできると
おおつぴらに
明るく宣言したものであつた

彼女の眠りは
十重二十重に見張られていた
そこが問題であつた

飛び立たねばならない
飛び出さねばならない
瘡かさのように戦な慄なく心臓を抱え
人差指の一本を
失つてしまふ前に

主のいない台所

味噌汁をつくる

何年ぶりか

何十年ぶりか

味の何某という粉末を放り込み

馬鈴薯の切り方は適当に

玉葱もほどほどに

刻んだ油揚げも放り込む

しかし味噌がない

肝心の味噌がない

主のいない台所

片っ端から戸棚を開け

味噌がない

何のことはない

食器入れの一番上から

知らんぷり顔で見下ろしている

馬鈴薯は生煮えで

玉葱の刻み方は大き過ぎて

まるで野菜の煮込みよろしく

汁の匂いは一人前で

確かに味噌汁ではあるが

馬鈴薯は生煮えで

玉葱と油揚げが蝙蝠の形に

鍋の表をこんもり覆っている

主のいない台所

炊飯器がぶつぶつ唸り出し

馬鈴薯の切り屑が

シンクにでかい堰をこしらえ

つけっぱなしのテレビに

大雨雷雨竜巻洪水注意報を

役所の公示まがいなきのうから

ずっと貼り付けている

無音

特急列車が街を縦横に走る
高架線や地下鉄から
いつの間にか這いずり出して
心臓病患者の多いビルの屋上にまで
よじのぼってくる

まるで音もなく
あの枕木をガタピシ踏んずけて通る
威圧感もそれこそないのだが
軽くてかるすぎて
千枚通しのように
窓のガラスを突き抜けてしまう

ことぐらい
簡単なことなので
ヒトビトはたやすく
そいつを通過させてしまう

実際ヒトビトはそいつを拒む理由は
なに一つないのだし
そいつが目にも止まらぬ
速さで通り抜けるので
茶の間でお茶を楽しんでいる場合だって

お茶の中にそいつが
無色透明のハイセツブツや
やに下がるような口説を垂れ
振りまいて逃げていったことすら
知らないときがある

(付記)

詩等の韻文については、これまで「有森信二」名
で発表してきましたが、今後は俳句の筆名である
「松本西夏」名に変えさせていただきます。